

伝道ボックス75

親鸞聖人と現代いまを生きる

池田 勇諦

目次

■ なぜ御遠忌を勤めるのか	1
■ 真面目とは何か	4
■ 基準が定まらない私たちの善悪	7
■ なぜ善悪の基準が定まらないのか	10
■ 現実主義者ほど恐ろしいものはない	12
■ 人間にとってのもう一つの視点	17
■ 人間が持っている因	20
■ 本当に主体的な人間	25
■ 本当に人間を真面目たらしめるもの	27
■ 歩む信——三往生	30
■ 誘惑との闘い	38
■ 「私ひとりがあったところで何も変わらない」という誘惑	42
■ 仏法に生きることは「闘い」の生活	45
■ 仏法によって聞きひらかれる私の使命	51
■ 出発点に立つ	58
■ あとがき	59

【凡例】

本文中の真宗聖典とは東本願寺出版部発行『真宗聖典』を指し、真宗聖教全書とは大八木興文堂発行『真宗聖教全書』を指します。

■なぜ御遠忌を勤めるのか

二〇一一年、京都の本山・真宗本廟（東本願寺）におきまして、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要がお勤まりになりました。そのことを受けまして、日本全国にある三十の教区においても御遠忌法要がお勤まりになっていくことをございます。

真宗大谷派では、宗祖御遠忌にあたって「今、いのちがあなたを生きている」という御遠忌テーマが発表されました。御遠忌テーマというものは、御遠忌がどういった願いのもと、どのようなかたちをもってお勤めされるのかということ掲げる意味がございます。本山においては、この御遠忌テーマをもとに御遠忌をお迎えるまでさまざま取り組み

がなされてきました。

そして、各教区においても、教区でお勤まりになる御遠忌に向けたテーマやスローガンを掲げ、教区での課題を明らかにして、教区御遠忌法要に向けた歩みが進められるわけです。

こうしたテーマやスローガンが掲げられていることは、宗祖親鸞聖人の御遠忌法要をお勤めする意義が、単に法要をお勤めすることが目的ではないということです。どこまでも「私たち一人ひとりが親鸞聖人の真まことの教えに出遇であう」、その機縁きえんとするためにお勤まりになるということです。この一点が欠落しますと、御遠忌法要といいますが、単なる一つのイベントとして一過性で終わってしまうと言わざるを得ないの

であります。

そうしたことを思います時に、「私にとって親鸞聖人とは何なのか」ということがあらためて自らに問われてくるのです。「自分にとって親鸞聖人とはいかなるお方なのか、いかなる存在なのか」、この一点を問わなければ「親鸞聖人、親鸞聖人」と言ってみただけで、それは単なる偉人崇拜すうはいに過ぎないのではないか。親鸞聖人を向こう側に見て「お偉い方であった、ご苦労をなさった方だ」と言っているということであれば、それはまったく第三者的な立場、見物の立場ではないのです。

ところが、御遠忌法要がお勤まりになるといことは、そうではなくて、「私にとって」という、この一点が大事なのです。私に先立って「人

生の宗しゅう」、つまり何を依よりどころに生きるのかということ問い続け、そのことに生きられた親鸞聖人の教えから私自身の生きる根柢・方向を教えていただく、その一点がなければ「私の親鸞聖人」にはならないわけです。

だから、私たち一人ひとりにとって、一にも聞法、二にも聞法のほかにはなく、举足こそくいっぽ一步（足を挙げて一步を踏み出す）、聞法道もんぼうどうに立つ機縁とするためにお勤まりになる御遠忌法要なのです。

■真面目とは何か

このことをしっかりと腹に据すえて、「自分にとって親鸞聖人とはいかな

る存在なのか」を自分自身に問います時に、私が一番言いたいことは「人間にとって真面目まじめとは何か」ということです。人間としての真面目さというのは何なのかということを、私は親鸞聖人の教えからもっとも根本的に知らされるからであります。

今は亡き先覚せんかくのお言葉に「人間は真面目であることは大切であるが、真面目だけでは流転りてんするばかりだ」という一言があります。

私はこの言葉に接した時、自分の心に突き刺さるようなものを覚えましたが、「いったい真面目とはどういうことなのか」。それ以来、ずっとその問いを引きずってきましたが、とくに今日、私たちが身を置く時代社会のさまざまな状況を考えた時に、この一点が殊ことのほか思われてなりま